復旧に全力 厚い信頼得る

加藤建設会長 加藤 弘さん

東海地方に甚大な被害をもたらした伊勢湾台風から50年。直撃を受けた愛知県・海部郡で、昼夜を問わず復旧作業にあたった加藤建設会長の加藤弘さんは「大変だったけど、いい教訓になった」と振り返る。地元企業として、いち早く決壊現場に駆け付けて仮締め切り工事を完成するなど尽力するも、事業再開の遅れや本復旧工事の受注を逃すなど苦汁をなめたこともあったが、この過酷な復旧作業で国・県から大きな信頼を得て、後になって舗装工事など公共工事を受注することにもつながった。

（津島）

出会い その時

「小原の集中豪雨の時、伊勢湾台風の経験を生かすことができた」と加藤さん

ひと言

伊勢湾台風にあって、我慢を覚えた

試練与えた〝伊勢湾台風〟

突貫工事を陣頭指揮

●1959年9月26日。伊勢湾台風が紀伊半島に上陸した時、加藤さんは専務として営業担当兼現場責任者として、当時5カ年計画（1956－60年）で進められていた飛島・鍋田両海岸の堤防を高くする工事にあたっていた。

「台風上陸の2日前から海岸に立っていられないほどの強風が吹き始めた。徹夜で工事現場をパトロールしていたが、次第に水位が上がってきた。いつもの台風とは違う、これはまずいと直感して、私たちもすぐに蟹江にある本社に逃げ帰った。蟹江川も決壊し、またたく間に濁流にのみ込まれていった」

●さらに、苦難が待ち構えていた。台風が去った後、当時の社長が船で現場に向かうと、これまで懸命に築きあげてきた堤防は破壊され、海部郡が最も大きな被害を受けていた。会社の機材や資材は流され、社屋も水没した。同業者の多くが被害の後始末に追われていたが、同社は「地元のためにも、いち早い復旧作業を」と、躊躇（ちゅうちょ）なく名乗り出た。それから突貫工事が始まった。

「自らも水害にあいながら、先代社長は『いったん引き受けた仕事は、必ず最後までやる』と大号令をかけた。蟹江川の堤防の決壊は100㍍に及んだ。復旧作業は昼夜を問わず行われ、突貫作業の陣頭指揮を執った。水を含んだ土砂はひたすら重く、腰まで水につかり足をとられ泥にまみれて3日間休みなしに作業を続け、いち早く決壊個所の仮締め切りを完了させた」

昼夜を問わず、復旧工事に当たった加藤さんたち

プロフィル

かとう・ひろし　1934年（昭和9年）生まれ。名古屋工業高校中退後、加藤建設入社、73年6月に社長、2003年12月に会長就任。趣味はゴルフ。75歳。愛知県蟹江町出身。

●その後も休むことなく鍋田海岸に向かった。陸路はすべて寸断され、土のうや砕石、丸太などのすべての資材を船で運んだ。作業は困難を極めたが、辛抱強く進められた。最後の締め切り作業に取りかかっていた時に、県から作業中止の命令が下った。自衛隊の「尾西作戦」と呼ばれる2750㍍にわたる締め切り作業をサポートする作業船の航路を確保するために、締め切り直前の作業を中止しなければならなかった。尾西作戦中も航路確保のため、完成していた仮堤防が高潮に飲み込まれるのを見送り、決壊防止の刃口止めの維持確保にあたっていた。尾西作戦の終了後、再び鍋田海岸に向かった。

念願だった舗装事業に乗り出した当時の加藤さん

「まず月の輪工法を試みたが、新鋭の大型サンドポンプが2台とも故障して失敗に終わった。決壊部は水深20㍍以上に達していた。次に木工沈床工法が採用された。丸太を井桁状に組み、そこに玉石を投入して沈め、洗掘を防止する伝統工法により、最大水深22㍍におよぶ決壊部の仮締め切りを完成させた。台風襲来から2カ月が経過していた」

経験生かし 阪神大震災で架橋も

●国の復旧作業に協力し、社有地は最後まで資材置き場として利用されていた。その結果、仕事の再開時期が大幅に遅れることになった。

「復旧本工事が始まると、仮工事を手がけた業者がその部分を担当するのが、業界内の暗黙の了解だったのだが、政治力が働いたのか、当社は何故か外された。悔しかったが、我慢するしかなかった。こうした経験を通じて『我慢すること』を覚えた」

●しかし、こうした地域に貢献する企業姿勢は評価されていた。数年後、復旧工事を担当していた建設省（現国土交通省）の幹部が再び名古屋に赴任してきた時、国道の管理を任された。あの復旧作業の実績が買われ、行政の信頼を勝ち得ていたのだった。

「何とか復旧しようという想いが一番だったが、我慢に我慢を重ねてきて、ようやく努力が報われた思いがした」

●実は、家業を継ぐべく入社した加藤さんだったが、モータリゼーションの進展に備えて、舗装工事に進出する夢をもっていた。密かに準備を進めていた矢先、伊勢湾台風に合い、その夢はとん挫していた。

「舗装工事は必ず伸びると確信していたが、土木工事を専門にしていた当時の社内では理解されなかった。先代には内緒で関連設備を買い、仲間を巻き込んで事業計画をまとめて、61年に舗装事業に乗り出した。投資リスクも大きかったが、それが功を奏して、国の道路整備計画とも呼応し順調に受注を伸ばし、他県へも事業領域を拡大することができた」

●伊勢湾台風での経験と実績を生かして、13年後に三河地域で起きた小原地区の集中豪雨では『絶対に被災地を復興させる』という強い想いで、最後まで現場で復旧作業を続けた。また、阪神・淡路大震災時には高速道路の架橋の復旧工事を任された。

「今振り返ると、伊勢湾台風が試練を与えてくれた。我慢して努力すれば、いずれ実現できる。当社にとっても大きなターニングポイントになったと言える。困難に立ち向かう団結力と、時代を読んだ新分野への進出をめざし、71年から浅層混合改良を手がけ、技術を磨いてオリジナル工法であるパワーブレンダー工法を開発した。また基礎工事では、いち早く74年からPCW工事を手がけ、技術を磨きオリジナル圧入工法であるアーバンリング工法を開発した。そのほか、環境に優しい工法の開発に取り組み、新技術・新工法の開発に挑戦し続けている」

中部経済新聞（平成21年9月14日）